

被爆76年

ほっかいどう

反核医師・歯科医師の会

第66号 (2022年3月28日)

発行 核戦争に反対する北海道医師・歯科医師の会
http://northhankaku.web.fc2.com/
事務局 〒063-0061 札幌市西区西町北19丁目1-5
勤医協札幌西区病院医局内
☎011-663-5711 Fax011-666-4119

核廃絶への道と 日本政府の役割

代表委員 川島亮平



歴史的な「核兵器禁止条約」の発効から1年。条約署名国は86カ国、批准国は59カ国に達し、「核廃絶」を求める世界の流れは確実に前進している。昨年秋の第76回国連総会でも禁止条約の参加を促す決議は加盟193カ国の3分の2の128カ国の賛成で採択されている。

この夏の第1回締約国会議では「核廃絶」に向けた具体的な枠組みをめぐる議論が始まる。これに核軍事同盟 NATO 加盟国のノルウェーとドイツ両国がオブザーバー参加を表明し、今後他の核依存国への波及効果も期待される。

これに対し禁止条約には一貫して反対してきた核保有五大国は、1月3日共同声明を発表し、「核戦争に勝者はなく、決して戦ってはならないことを断言」し、NPT（核不拡散条約）第6条の義務へのコメントを表明している。国連総会では禁止条約を非難したが、この声明では条約への言及は一切ない。これは核兵器の禁止・廃絶を求める世界の世論に追い込まれての声明に他ならない。その一方で核兵器の近代化と増強を進め、核に固執する姿勢は変わら

ない。米中の覇権争い、ウクライナ問題など核保有国間の対立は軍事衝突から核兵器の使用の危険性も増してきている。

このような情勢にあって、唯一の被爆国日本政府の役割が問われている。岸田政権は歴代の政権と同様、禁止条約に反対し続けている。①核保有国が一つも参加していないから②日本は核保有国と非保有国の橋渡しをするというのが本当に「核廃絶」を願うのであれば自ら禁止条約に参加して、核保有国に向けて参加するよう説得すべきである。核の使用を前提にしないで成り立たない核の傘、米国の傘に依存。それは2016年の「安保法」から、今日の「9条改憲」「敵基地攻撃能力の保有」を目指す危険な政治姿勢に通じる。

今、「核のない世界」を実現するために世界をリードできる日本政府、憲法9条に立脚して世界平和に貢献できる日本政府の実現への努力が私たちの責務である。

主な内容

- ◇第33回総会で決まった事項 2
- ◇記念講演「今やっちはいけない地層処分」(小野有五) 5
- ◇他都府県の会報から 16
- ◇エッセイ(福山桂子、井上篤) 18
- ◇2022年4月以降の主なイベント 19

第33回総会で決まった事項

(2021年10月16日、北海道民医連会館＋オンライン併用)

2020年度活動報告と2021年度活動方針

1. 2020年度活動報告 (主なもの、2020/4-2021/3)

- (1)北海道原爆死没者追悼会に会員2名が参加 (20年8月6日、札幌市)
- (2)会報の発行 第63号(20年9月30日)、第64号(21年3月27日)
- (3)運営委員会を1回(20年10月2日)、事務局会議を1回(21年3月27日)行なった(いずれも道民医連会館)。
- (4)核戦争に反対する医師の会(PANW、全国)第16回全国大会に塩川事務局長が参加(20年9月27日、ネット)。同常任世話人会に塩川事務局長が参加(20年9月27日、21年1月17日、ネット)
- (5)「泊原発を再稼働させない・核ゴミを持ち込ませない北海道連絡会」の全体会議(20年7月12日、9月19日、11月14日、21年1月23日)に参加。
- (6)フクシマから10年、原発と核ゴミを考える3.14集会＋核ゴミ問題を考える北海道会議設立集会に会員3名が参加(21年3月14日、札幌エルプラザ)
- (7)核のゴミ受入れに反対する声明を寿都町長・神恵内村長・北海道知事に送付(20年10月5日)

2. 2021年度活動方針と事業計画

【活動方針】

- (1)核兵器禁止条約が発効した新たな情勢のもと、全道の医師・歯科医師・学生のなかに「核兵器と核発電所(原発)は21世紀の早い時期になくそう」の世論を高め、ひきつづき会員の拡大につとめる。とくに後継者となる若い層を重視しよう。
- (2)全国の核戦争に反対する医師の会(PANW)に結集し、IPPNW(核戦争防止国際医師会議)やICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)の活動に協力する。
- (3)核戦争に反対する他団体との共同をつよめ、活動の輪を広げる。
- (4)被ばく者の健康管理に協力する。
- (5)憲法9条改悪の動きに反対し、「医療九条の会・北海道」と連帯して活動する。
- (6)あらたな被ばく者を生み出さうる原発の再稼働や核のごみ持ち込みを許さず、原発のない社会をめざす。

【事業計画】

- 1) 会報の発行 年2回(9月、3月)
- 2) 原爆死没者追悼会・反核医師のつどいなど各種イベントへの参加・代表派遣
- 3) ホームページの定期的更新と充実
- 4) オンライン講演会の開催(核のごみ問題や福島処理水の問題など)

3. 泊原発、核のごみ最終処分場問題 (寿都町、神恵内村)

- 1) 本会も加盟する「泊原発を再稼働させない北海道連絡会」が2020年11月、「泊原発を再稼働させない・核ゴミを持ち込ませない北海道連絡会」に改名された。
- 2) 2021年3月14日に設立された「核ゴミ問題を考える北海道会議」への加盟(賛同団体として)について本総会で確認された。なお、会費の規定はなく、個人・団体からのカンパが財源となっている。

2021年度役員・名誉会員

【会長】

上野 武治(北大名誉教授)

【代表委員】

伊古田明美(勤医協中央病院内科、札幌市)
大倉 秀顕(北愛歯科クリニック、札幌市)
川島 亮平(勤医協札幌西区病院)
北川恵以子(札幌こぶしクリニック)
鈴木 頌(勤医協札幌病院)
武井 弥生(余市協会病院地域医療国際支援センター)
芳賀 千明(道北勤医協一条通病院整形外科、旭川市)
平野 哲夫(市立札幌病院腎移植外科)
松崎 道幸(道北勤医協旭川北医院)
吉岡 猛(道東勤医協釧路協立病院)

【事務局長】

塩川 哲男(勤医協札幌西区病院)

【事務局次長】

福原 正和(札幌市医師会夜間急病センター)

【監事】

三浦 彌(三浦メンタルクリニック、札幌市)
峯廻 攻守(札幌西円山病院)

【名誉会員】

福地 保馬(北大名誉教授)
牧田憲太郎(牧田病院、札幌市)

(五十音順、敬称略、全員再)

2020年度決算報告と2021年度予算

1. 2020年度決算報告

収 入

	20年予算	20年決算	19年決算	18年決算
前 年 度 繰 越	432076	432076	462071	601481
会 費	500000	499500	727500	655000
雑 収 入 (募 金 等)	10000	67509*	110005	34534
銀 行 利 息	0	0	0	0
合 計	942076	999085	1299576	1291015

*入会岩隈先生より多額募金あり

支 出

	20年予算	20年決算	19年決算	18年決算
総 会 費 用	10000	0*	289320	267040
印 刷 費	270000	256900	269623	277723
郵 送 事 務 費	100000	85810	101085	92711
振 込 手 数 料	20000	16268	20200	9210
渉 外 費	80000	61099	67392	80840
つ ど い 補 助	0	0	0	101420
30 周 年 会 報 合 本	0	0	119880	
予 備 費	462076	0		
合 計	942076	420077	867500	828944

*総会は講師・会場費からず

収支決算

	20年決算	19年決算	18年決算	17年決算
収 入 合 計	999085	1299576	1291015	1483770
支 出 合 計	420077	867500	828944	882289
次 年 度 繰 越	579008	432076	462071	601481
つ ど い 基 金	79534	79534	0	0

4) 財産目録

	20年決算	19年決算	18年決算	17年決算
現 金	106200	0	210300	0
郵 便 局	543323	502591	242757	592467
銀 行	9019	9019	9014	9014
合 計	658542	511610	462071	601481

2. 2021年度予算

1) 収入の部

	21年予算	20年予算	19年予算	18年予算
前 年 度 繰 越	579008	432076	462071	601481
会 費	550000	500000	550000	550000
雑 収 入 (募 金 等)	10000	10000	10000	10000
銀 行 利 息	0	0	0	0
合 計	1139008	942076	1022071	1161481
つ ど い 基 金	79534	79534	0	0

2) 支出の部

	21年予算	20年予算	19年予算	18年予算
総 会 費 用	60000	10000	270000	250000
印 刷 費	270000	270000	300000	300000
郵 送 事 務 費	100000*	100000	95000	80000
振 込 手 数 料	16000*	20000	12000	10000
渉 外 費	80000	80000	100000	100000
つ ど い 補 助	0	0	0	0
30 周 年 記 念 誌 合 本	0	0	80000	
予 備 費	613008	462076	165071	421481
合 計	1139008	942076	1022071	1161481

*郵便・振込料値上げ考慮

【つどい・IPPNW 関連決算】

	20年決算	19年決算	18年決算	17年決算
前 年 繰 越	79534	0	0	269164
募 金 合 計	0	238000	270000	264000
I P P N W	0*	0	200000	530000
つ ど い	0*	158466	171420	56476
剰 余 金	79534	79534	-101420	-53312

単 年 度 収 支	79534	79534	-101420	-322476
-----------	-------	-------	---------	---------

*コロナで集会出張なし

【特別決議】

核兵器禁止条約の発効を力に、 今こそ核兵器廃絶に取り組む政府を

昨年春に開かれるはずだった核不拡散条約（NPT）再検討会議は新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延のため再延期となり、来年1月の開催が予定されています。

また、2017年7月に国連で採択された核兵器禁止条約は、昨年10月、発効に必要な50ヶ国の批准に達し、今年1月22日、ついに発効しました。現在、署名国は86、うち批准国は56となっていますが、残念ながら日本政府は核保有国や他の核依存国とともに、一貫して禁止条約に背を向けています。来年3月22―24日には初の締約国会議がウィーンで開かれる予定であり、日本政府のオブザーバー参加を求めます。

安倍政権を引き継いだ菅内閣はちょうど一年で政権を投げ出した格好になりましたが、危険な「土地利用規制法」を国会で成立させ、5兆円を超える軍事費の概算要求を計上するなど、ひきつづき改憲・軍拡のたくらみを止めさせる運動が重要です。

10月14日、岸田文雄新首相の下で、衆議院が解散され、4年ぶりに総選挙が行われることになりました。岸田首相は、就任後の記者会見で「外務大臣時代から、核兵器のない世界を目指し、ライフワークとして取り組んで来た」と述べていますが、岸田氏の根底にあるのは「核抑止」への固執です。「被爆地広島出身の首相」を語りながら、被爆者や圧倒的多数の国民が求める核兵器禁止条約への参加を拒むことは許されないことです。

私たちは道民の命と健康を守る医師・歯科医師として、核兵器禁止条約への署名と批准をめざし、核兵器廃絶と被爆者支援に向けて真摯に取り組む政府の実現を求めるものです。

2021年10月16日

核戦争に反対する北海道医師・歯科医師の会 第33回総会

第33回総会（2021/10/16）に臨席いただいたご来賓

◇北海道被爆者協会 会長代行 廣田 凱則^{よしのり}
事務局次長 北明 邦雄

同総会にメッセージを寄せていただいた団体

◇核戦争に反対する医師の会（全国）代表世話人 中川 武夫
原 和人
飯田 哲夫

（敬称略）



記念講演会の様子



被爆者協会より廣田会長代行（左）と
北明事務局次長

いまやっではいけない 地層処分

小 野 有 五

（北海道大学名誉教授、「行動する市民科学者の会・北海道」事務局長）



おの ゆうご：1948年、東京生まれ。理学博士。専門は自然地理学、地質学。北海道大学名誉教授。「自然をみつける物語」全4巻（岩波書店）で第44回産経児童出版文化賞、地形学的研究による自然保護への貢献により、第1回沼田 眞賞を受賞。『たたかう地理学』（古今書院）の出版と、これまでの研究・活動により、日本地理学会賞、日本第四紀学会賞などを受賞。「行動する科学者の会・北海道」を設立し、原発、地層処分事業にも反対している。

突然の手上げ

「知ってましたか？いま地層処分してはいけない8つの理由」というパンフレットを昨年（2020年）11月につくりました。

2020年8月に寿都町の片岡春雄町長が、突然、地層処分の文献調査の候補地になるという手を上げられ、本当に驚きました。私が最初に寿都に入ったのが9月の初めです。それから1年ちょっと経ちますが、ほとんど毎月、何度も伺いました。すぐに反対する町民の会が立ち上がりましたので、その方たちを支援するというので、ずっとやっております。

一方的に、町長がたった一人で決めて引っ張っていったしまったという状況なんですね。そして議会でもある程度議論はされたんですが、賛成と反対が4対4で完全に拮抗していて、議長さんが町長派の方なものですから、それで決められてしまうという状況でした。

私たちとしては、まず町民全体の意思が一番大事なことだと思ひまして、住民投票をやったうえで決めてほしいということで、住民投票の実施を目標にして動いてきたわけですが、それも同じような形で否決されてしまったわけです。要するにこれを最初に決めたのは議会ではなくて、全員協議会という訳のわからない、いわゆる密室の中で決められているわけです。当然その議事録はあるわけですが、議事録の公開を求めても、すべて拒否されてしまう。

あとは、今年（2021年）、もう1週間後に始まる町長選挙で戦うしかないねということで、運動をしてきましたけれども、その中で、寿都町やそのあとすぐ手を上げた神恵内村だけではなくて、北海道内の別のところでも電力会社がいろいろ画策をして手を上げさせようという企みをしているということが

わかりました。単に寿都町や神恵内村だけの問題ではないと思って、もっと全道的に、もっといえば全国的に、そもそも地層処分とはどういうことなのか、そしてそれはどこが間違っているのかをできるだけわかりやすく知っていただきたいと思って、このパンフレットを2週間ぐらいでほとんど寝ないでつくったわけです。

「いま」が大事

きょうの講演のタイトル「いま、地層処分してはいけない8つの理由」の「いま」ということが非常に大事です。これはやはり時間の概念を入れないと、この問題は解決できないということなんです。ですから「いま」してはいけないんだ、「いま」する必要があるんだろうか、全くありませんということをもっと知っていただきたいと思います。

逆にいうと、電力会社、そしてNUMO（原子力発電環境整備機構）、経産省、こういう人たちが寄ってたかって、今すぐやりなさいという、もう余裕がない、大変なんですよと、ものすごい危機をあおっているわけです。つまり彼らが言っている「いま」というのは、彼らなりに切実なんです。

最終処分場には核のゴミすべてが

持ち込まれる可能性

「いま地層処分してはいけない8つの理由」の1番目は、要するに、今やろうとしているのは「最終処分場」だということですね。この「最終処分」というのは、「最終」ですから、もうここから先は行き場がありませんということです。ということは全国原発のゴミ、あるいは福島で汚染した土壌も来る可能性がある。汚染土はフレコンバッグという大きなバッグに入れて、野積みしていたのを、オリンピックで外国のメディアに見られたら格好が悪いと

ということで、全部地下に埋めちゃったわけです。

しかしこの汚染土は、全部、中間貯蔵なんですね。ですから福島県との約束で、30年したらこれはまた外へもっていきますという約束をしているわけです。ですから30年後にはこれもまた寿都町に持ってこられる可能性もあるということになります。

廃炉にすること自体が、日本ではこれから始まることですね。そしてそれを解体してどうするのか。この放射能まみれのものをどこへ持っていくのか。これも最終処分場があれば、そこにすべて持ち込まれる可能性があるということです。

いま地層処分事業をやろうとしている NUMO が埋めさせてくださいと言ってるのは、たった2種類の核廃棄物です。1つが高レベル放射性廃棄物、2つ目が低レベル放射性廃棄物という、たった2種類のものだけを埋めさせてくださいと言ってるわけですね。でもそれはあくまで現在の法律の下ではその2種類だけということなんです。法律なんていうのはすぐ変わります。さっきお話ししたように、廃炉が始まって解体したゴミをどこへも持っていきやうがない。あるいは福島のゴミも県外に持ち出さなきゃいけない。それから青森県の六ヶ所村にあるゴミ、これも青森県との約束で、あとたぶん25年ぐらいすると、全部持ち出さなきゃいけなくなります。その持ち出し先が全然決まっていなわけですから、最終処分場が決まれば、もうこんなにうれしいことはないですね。最終なんだから、何でも持ち込めちゃうということでしょう。そんな危険なものをいま OK したら大変なことですよということです。

そして、そういうものを持ち込まなきゃいけなくなるのは20年後だとしても、今なぜそんなに急ぐのかというと、最初の日本地図(右図)を見ていただくと、棒グラフがたくさんありますね。この棒グラフで、下の部分(図では赤)が、今の原発の敷地の中に保管されている使用済み核燃料の量になります。そして上のほう(図では青)がまだ空いているスペースです。それがほとんどなくなっているのがわかると思います。

柏崎刈羽はまだいいほうです。福島はもうほとんどないですね。それから泊はまだだいぶ余裕があるんですが、伊方・玄海・川内はほとんど余裕がない。そういう状態に来てしまっている。

一番余裕がないのが実は六ヶ所村です。これは原発ではなく、最初から中間貯蔵施設なわけですが、そこがもういっぱいになっている。ですからこれがいっぱいになると、いくら規制委員会が原発の再稼働を無理やり認めても、そのゴミを置く場所がなくなっちゃえば、これはもう自動的に再稼働できなくなるわけですね。電力会社は今そこまで追い込まれているわけです。

使用済み核燃料

使用済み核燃料というのは、長さが4メートルの燃料棒です。これは巨大なプールに入っていて、プールの中の水でまず冷やすわけです。動かないように枠の中に入れてはいるわけですが、従来はそれぞれの枠の中で余裕があったわけです。水で冷やすんだから周りに水が十分ないと冷えない。すぐ水は温まっちゃいますから。

ところがもう満杯になってしまうというので、今これを今までの3倍くらいの密度に詰め替えてるわけですね。これを英語でリラッキング(reracking)といいます。ギュウギュウ詰めにしてはいるのです。ちょっと大きな地震が来たら、お互いにおつかつたりする危険性が増えているわけです。

なぜそんな一時しのぎしかしないのかということ、要するにコストがかかるからです。電力会社としては、本当はこんなものは早く原発の外に持って行ってしまいたいわけですね。早く持ち出したいものだから、とりあえず今こうやってギュウギュウ詰めにして、すぐにでも持ち出せるようにしてある。

電力会社や NUMO は「みなさんゴミを出していただいて、それを始末しないというのは無責任ですね」という言い方をしています。これを聞くと「そうかあ」と思っちゃう人が非常に多いんですが、それはとんでもない話です。ゴミが出ることは最初からわかってたわけです。それを平気で、そんなものは考えずに勝手に原発を始めたのが電力会社です。私たちが原発をやってくれと頼んだ覚えは全くありません。それで大もうけしたのも電力会社ですね。ですから最初からゴミが出るのがわかっていて、それをそこだけお前たちの責任だという、それこそ電力会社の無責任であると私は思います。



NUMO の問題点

問題なのは、この NUMO という組織ですね。これも非常に誤解が多いです。NUMO というのはたぶん経産省の中の核のゴミを扱う廃棄物課みたいなところを指しているんだろうと思っての人が8割か9割いますね。ところがそうじゃないわけです。

NUMO というのは、原発を持っている電力会社が100%出資してできた組織です。ということはほとんど電力会社そのものということです。それが仮面をかぶって、いかにも何か中立的な組織であるかのようにふるまっているだけに過ぎない。NUMO というのは何の略か、みなさんわかりますか。NUMO の NU はニュークリア（核）でしょう。M はマネジメントですね。O はオーガニゼーションです。

でも NUMO は、原発から出た使用済み核燃料という核のゴミを扱うところでしょう。ゴミというのは英語でウェイスト（waste）ですよね。本来ならニュークリア・ウェイスト・マネジメント・オーガニゼーション。英文名称はそうなっているわけです。でも略語の NUMO は、ウェイストという言葉完全に隠してるわけですね。日本語の訳は原子力発電環境整備機構となっていて、ここからもゴミという言葉が見事に消されてるんです。つまり最初からゴミというのを隠してるわけですね。そういうとんでもない組織が NUMO であるということです。名前を偽るということからして、私は信用できない。

そもそも NUMO は100%電力会社が出資しているということも隠していますね。聞かれれば答えるけれども、あえて自分からは言いません。やはりそういう人間の誠実性というものがひとかけらもない組織ではないかと私は思います。

ガラス固化体の放射能の変化

2 番目です。この**グラフ 1**が一番大事なグラフです。縦軸が放射能の強さで横軸が時間、そういう単純な図なわけですが、単位が10倍10倍になっています。要するに両対数スケールで描いてあります。時間も一目盛が10倍になっています。そしてこの時間というのはこの真ん中のゼロというところがありますね。これが核燃料を原発の中に入れた時点、これをゼロにして、それ以前の過去と入れてからあとの未来の時間というふうに分けてあります。

まずウランを地

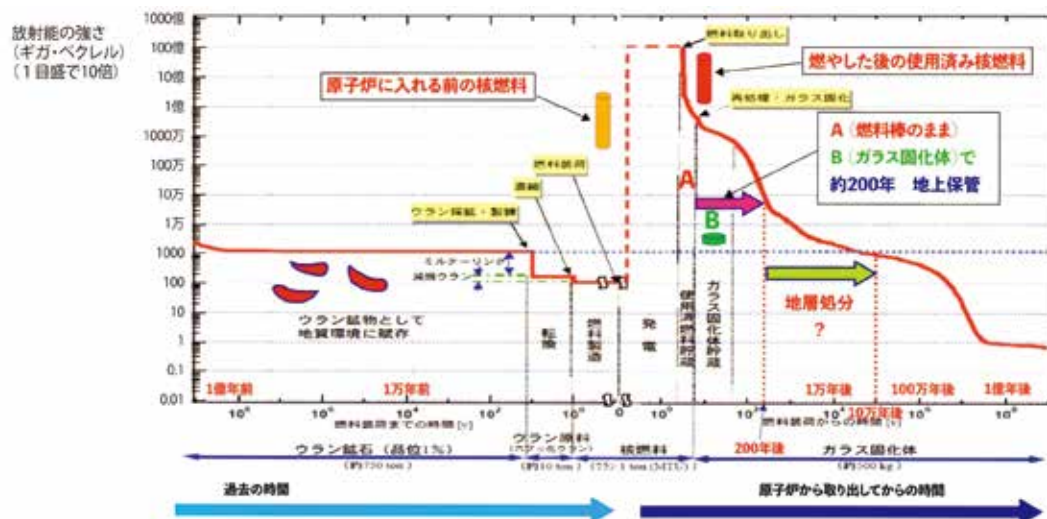
下から掘り出すところから始まるわけです。そのウランができたのは何億年前という時代ですよ。この地下に埋まっていた状態の鉱石としてのウランの放射能の強さというのはそんなに高くはないわけです。これを濃縮して、高さが4メートルもある巨大な燃料棒に加工して原発の中に入れるわけです。入れてそして原発を高温、高圧の状態にする。原発の中で燃やすというのはそういうことです。

そうしますと、一気に放射能のレベルが高くなります。だいたい100億ギガベクレルというところでもないところに行くわけです。そしてここからが普通の燃料との違いですね。普通の燃料は燃やしたあとは何も残らない。石炭ストーブだったら、石炭を燃やしたら石炭ガラしか残らないです。薪ストーブだったら薪を燃やしたらあとは灰が残るだけですね。その灰は火をつけたって燃えないし、むしろ畑にまいたらいい肥料になるようなものでしょう。

ところが原発の燃料は大違いなわけですね。燃やす前と燃やした後で、全く放射能の強さが変わらないんです。普通こんなことは考えられないでしょう。放射能の強さは全然変わらないし、熱ももちろん高いままです。これをなんとか冷やしていかなくちゃいけないということで、プールの中に入れるわけですね。ここに A、B と書いてありますけど、この A というのがプールに突っ込んだ状態になります。そうやってまず水で温度を冷やしていく。

そして、放射性物質というのは自分で変化して壊れていきます。どんどん別のものになっていく、これが放射性物質の特徴ですね。ですから放射能自体は減っていくわけですが、それに恐ろしく時間がかかるわけです。

つまりもともと地下に埋まった自然状態のウランの放射能のレベルに戻るまで10万年かかるということです。10万年をもっと縮められないかと、研究されているようですが、残念ながら現在の技術では縮めることが全くできていません。



グラフ 1：ガラス固化体の放射能の変化

そして次のBというところは、ガラス固化体への再処理ですが、今のプールの中に入ったのがAという状態だと思ってください。ほとんどはプールに入ったままなのですが、いくつかの原発ではこれを取り出して、今度はこういう黄色い大きなタンクに入れています。こんどは空気で冷やすので、乾式貯蔵といえます。

空気はどんなに夏、暑くてもせいぜい30℃ですよ。でもこの核のゴミは数百度あるわけですから、30℃なんていったら本当に冷たいわけです。ですから空気で冷やしていく。もちろんそのためには、その中で核燃料棒がガタガタ動いたりしたら大変ですから、キャスクと呼ばれる頑丈な枠に入れて動かないように固定して保管しています。

現時点で、乾式貯蔵というのは完成した保管技術なんですね。これで今とくに問題が起きてくることは全くないのです。ですからこれをそのまま続ければいいと私たちは主張しています。

もう一度このグラフ1を見ていただくと、放射能は、原発から取り出した時点で一気に減るんですね。そしてそこからちょっと緩やかになるけれども、かなり急激に減ります。要するに、曲線の変換点みたいなのが2つあります。この2回目の変曲点、1回目に急に減って、ちょっとダラダラするけれども、またかなり急に減る。ここが200年なんですね。ですから200年間保管しておく、相当に放射能を減らすことができます。

だいたい原発から取り出した直後の10万分の1になります。10万分の1まで放射能が落ちるわけですね。ですから私たちは今そこまでは地上で管理したらどうですかと言っている。だって管理技術ができてるわけですから、何も不安はないわけですね。

200年経ったら、もしかしたら地層処分もいいかもしれない。というのは、200年前を考えてみてください。200年前に、今のように自動車が走ったりロケットが飛んだり、そんな技術はありましたかということですね。200年前の人類の科学技術というのはまだまだ非常に未熟なものだったと思います。ですからこれからの200年を考えたら、はるかにすごいことができるはずだと思います。そこは人間の科学技術の進歩を信じます。

私がやっている活断層の研究なども、200年経てばかなり進むと思います。200年前にはそもそも活断層なんていう概念すらなかったわけです。地震がどう起きるなんてことさえわかってなかったのが200年前です。ですから200年経てば、相当進歩するに違いない。

地層処分の技術は未確立

ところがNUMOの考えはそうではないんですね。Aのプールに入れておいたまま、なるべく長く置いておいて、そしていきなりそれを取り出して、Bの

乾式貯蔵にはいかないで（Bにいくとまたお金がかかりますから）、この燃料棒をいきなり六ヶ所村に持って行って、そこで再処理をやりたいわけです。

再処理というのは何かというと、放射能だらけのこの核燃料棒をぶった切るわけですね。切って溶解してドロドロにして、そこからプルトニウムを取り出すんです。残りはガラスの中に入れて固めちゃう（ガラス固化体）。このガラス固化体を地下に埋めるのを地層処分と称しているのです。

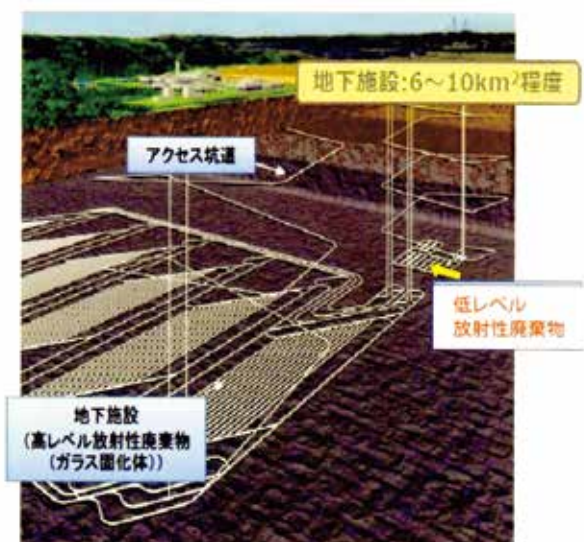
ところが、まずガラス固化体にする再処理が日本では全くうまくいきません。ですからご存じのように、イギリスやフランスに持って行って、そこで再処理してもらっているわけですね。再処理したものを持ち帰って保管している。この保管も、乾式貯蔵です。

NUMOが出してる写真(略)を載せましたが、厚いコンクリートの壁（天井）があって、この下で貯蔵しているわけですが、その天井に人が立っていて、大丈夫です、という写真です。NUMOも一所懸命宣伝していますよ。乾式貯蔵で全然大丈夫、人間がいたって全然大丈夫ですよ。ですから地上でこうやって保管することに何ら問題はないわけです。ところがそれをやっていると金がかかってしょうがないわけですね。ですからNUMOとしてはそれを続けないで、早く地下に埋めちゃいたいのです。

ところが地下に埋める地層処分については、技術が確立してないわけです。ここが決定的な違いなんですね。ガラス固化体にする再処理の技術も、日本ではまだ確立しているとはいいいがたいですけれども、少なくとも乾式貯蔵までは十分にできています。ところが地層処分は世界的にまだ技術が確立していないのが現状です。確立していないにもかかわらずやろうとしている。そこが一番問題です。

3枚目には地層処分の**イメージ図**を載せました。深い坑道を掘ります。トンネルを掘って、300メートルより深いところで、こんどは水平に坑道を掘げて、ガラス固化体を埋める、というのです。このトンネルは要するに、一筆書きみたいなものでしょう。入口が1つでずうっとつながって、ぐるっと回ってまた元に戻ってくる。この総延長が200キロですよ。200キロメートルの連続したトンネルです。そこにも亀裂が入らないなんていうことはありえないでしょう。単にコンクリートで固めただけのトンネルですから。これが10万年間のあいだに全く壊れませんかなんていうことは誰も信じないですね。そういうところに埋めていくのが高レベル放射性廃棄物です。

地下まで、巨大なダンプカーかショベルカーみたいなものでガラス固化体が入った大きな入れ物を運んでいくわけです。運んで行って、これを1個1個、埋め込んでいくという作業ですね。でもガラス固化体というのはまだものすごい放射能を持ってい



ますから、強い放射能が出ています。鋼鉄の容器に入ってますが、鉄は放射能でボロボロに傷んでいきます。そして周りを粘土で固めているんですね。直径が2.2メートルという巨大な粘土のドラム缶みたいなものに詰めて、埋めるわけです。

どうしてかという、粘土は水を通しにくいという、それだけです。つまり地下にある地下水に触れないようにするために粘土で固めるわけですが、いくら粘土で固めてもいずれは地下水に触れてしまうのです、ただ粘土の中はさすがに水の動きが緩慢ですから、それで10万年持たせようというんです。

つまり地下に埋めて、放射能がもれないということじゃないわけです。最初からもれることは前提なんですね。ただ、もれるスピードを極力遅くしてあげましょうということなわけです。そこまでしか今の技術はできてない。もっとできてないのは、すごい放射能が出てますから、全部、遠隔操作なんですよ。人間は1人もいません、すべてロボットで運転して、遠隔操作でやる。この技術もまだできてない。

福島第1原発の事故でメルトダウン（実際にはメルトアウト～メルトスルー）したデブリを除去するということで一所懸命やってますけれども、あれも全部ロボットでしょう。ロボットというのは全部IC（集積回路）で動きます。だけどICというのは一番放射能に弱いわけですね。ですから強い放射能に触れたらどんなに精密なICであっても、それで動かなくなってしまいますね。ですから今やっていることは、いってみればロボットの開発をしているみたいなものですね。

危険なヨウ素129

3番目の理由です。NUMOが説明会をやってますが、説明することとしないことがあります。だいたい不都合なことは説明

しないわけで、とくに説明しないのが低レベル放射性廃棄物です。NUMOが埋めようとしているのは高レベルと低レベルの2種類ですよ。高レベルのほう（先ほどのガラス固化体）については一所懸命説明します。だけど低レベルのほうはほとんど説明しないですね。高レベルのほうさえちゃんとやってくれば、低レベルのほうは大丈夫だろうと普通は思いますよね。ところがそうじゃないわけです。

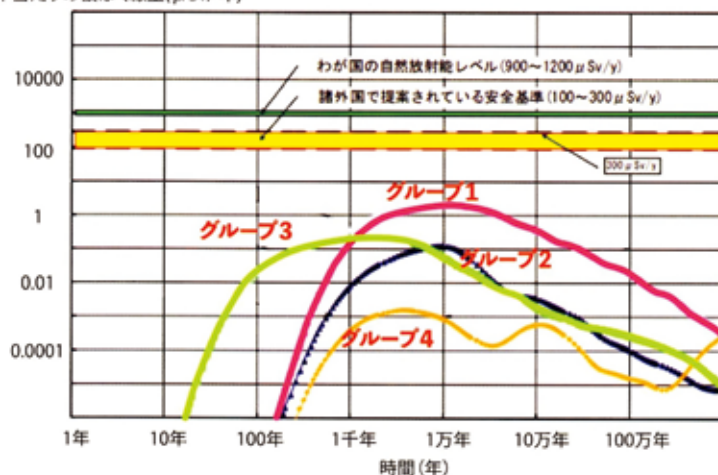
低レベル放射性廃棄物は別名 TRU といいます。ウランよりも原子番号は大きいものでトランスウランウム（超ウラン元素）と言うのです。その中に、人間にとっては危ないというものがいっぱい入ってるわけですね。その代表的なものがこのヨウ素129です。福島の事故で一番出たのがヨウ素131で、これが子どもの甲状腺がんのリスクを高めたといわれていますね。それに近いのがヨウ素129です。これは非常に厄介なことに、一番地下水に溶けやすいんです。

低レベル放射性廃棄物、TRU はどこに埋めるかという、地下の処分場の一番端っこに埋めるんですね。地下水というのは山のほうからしみ込んだ水が川とか海に向かって流れていきますから、上流と下流があります。図では左が上流なんです。右が下流で、すぐにもれだす TRU は、一番下流に埋めるということをちゃんと決めてあるんですね。こういうことも NUMO は一言も言いません。

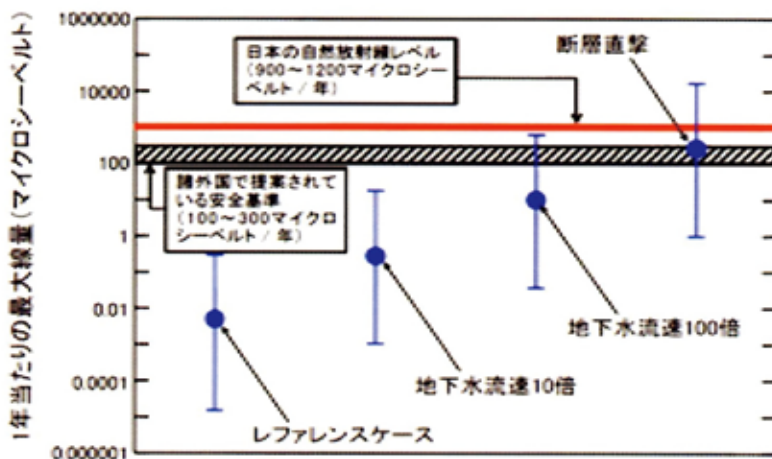
NUMO が作ってる**グラフ2**を見ると、同じように両対数グラフですが、縦軸は放射能の強さ（被ばく量）として表現されています。低レベル放射性廃棄物は4つのグループに分けられてますが、とくにグループ3は、10年ちょっとでもれ始めるんですね。そしてこのグループ1だったら100年ちょっとでもれ始めちゃう。グループ1とかグループ3には大量のヨウ素129が入ってるわけです。

つまりもれることが前提なんだけれども、10万年

1年当たりの被ばく線量($\mu\text{Sv}/\text{年}$)



グラフ2: 低レベル放射性物質が埋設後に地上にもれ出す時期と被ばく線量



グラフ4: もれ出す放射性物質による被ばく線量のちがい

なんていう話じゃないんですよ。わずか10数年で、しかも私たちの健康に非常に悪い影響を与えるものがもれ始める。

でも大丈夫ですと NUMO は言うわけですね。上のほうに2つ、日本と海外の安全基準のレベルが引いてあります。日本のほうが甘いわけですが、ほら、たとえもれても、安全基準よりもずっと低いから、どんなにもれたって大丈夫なんですみたいなことを言うわけです。ただ、その安全評価というのが一番問題なわけですね。

グラフ4を見ると、今の安全基準というのがこの上の2つの線ですね、赤い線と斜線です。で、実際にもれた時、レファレンスケースなんていう訳のわからない英語で書いてますけれども、これはすべてが想定どおりだったときの話です。ところが自然界ではいろんなことが起きるわけです。つまり想定どおりに地下水が動いてくれるとは限らない。地下水流れが10倍になったら、100倍になったら、どんどん被ばく量は上がります。そしてたとえば活断層が直撃したら、一挙にこの安全基準を超えてしまうということですね。つまり自然界ではそういうことが平気で起きるわけです。私たちが3・11で知ったことはそういうことですね。

科学者からすれば、あの程度の津波が来るということはわかっていたわけですが、それにしてもあそこ場所でそういうふうになるということまでは科学者もちょっと想定外だったかもしれない。でもそれは現実には起きたわけですね。ですから私たちが3・11で学んだことは、人間の想定なんてものは当てにしていけないということですね。常に最悪の条件を考えなければいけないということです。

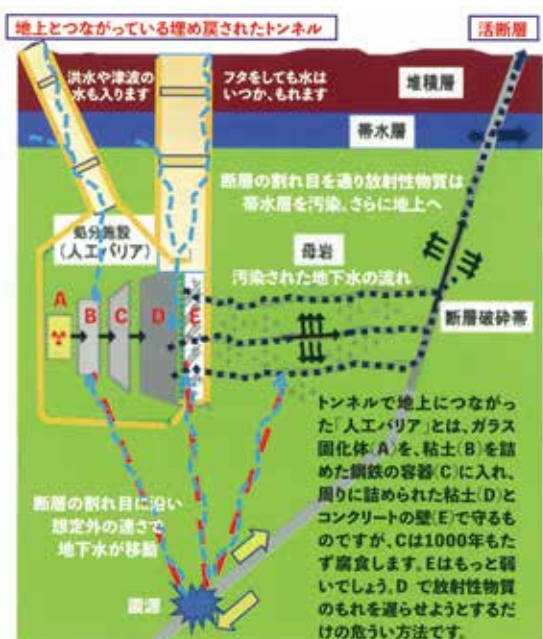
パンフレットの4ページ目の図は、NUMO が描いた図に、活断層の深い部分（ゆるく傾斜している部分）を私が付け足した図(右図)です。NUMO は、地上から急な傾斜で活断層が地下にのびる図を描いて、地層処分場は、活断層からこれだけ離してつく

るから大丈夫ですよ、と言っているわけです。ところが地層処分場で埋めるところっていうのはせいぜい地下300メートルでしょう。断層が動いて地震が起きるのは地下数キロから10キロくらいのところですよ。ですから活断層は、ずっと地下までいくわけです。しかも NUMO が描いたように、急に傾いている断層ってむしろ少ないんですね。だいたい地下では30度ぐらいで緩やかに傾いている、こういう逆断層が北海道では圧倒的に多いのです。

ですから、地上というか浅いところでは確かに活断層から離れたつもりでいても、地下ではまさに活断層の真上

に地層処分場をつくっちゃっているということになりかねないということですね。そういうところから地震が起きれば亀裂がいろんな方向に入りますので、1つでも亀裂が入ると地下水の流れが完全に変わってしまいます。ですからさっき言った想定外のことが起きるわけです。そして放射能を含んだ水が出てしまう。この活断層の中に入っちゃえばこれは一気に地上まで行っちゃいますから、すべてが汚染されてしまうわけです。

そして NUMO は「科学的特性マップ」というのを出してきたわけですね。日本全国を色分けして、黄色いところ、これは火山だからできません。灰色のところは人間がいずれ石炭とか天然ガスを掘るとか、そういう可能性があるんで、ここはやめましょう。あと活断層の上だけはやめましょう。だけどそれ以外の緑色のところはどこでもいいんですという図です。日本列島どこでも地層処分できるという地図を出して、「科学的特性マップ」と言っていたわけ



それが出た時から、これは「非科学的特性マップ」だと私たちは言っていました。とくに、海岸線の近くは濃い緑色に塗られていて、こういうところが一番いい、というのですが、それは使用済み核燃料を船で持てきたいからにすぎません。だから海岸に近いところじゃないと困る。というわけで、そこがより安全、という意味ではまったくないのです。

ところが、胆振東部地震は、NUMO が安全です、と色塗りしたところで起きちゃったわけです。しかも震度6以上のところはほとんど、NUMO が「適地」としたところになっています。いかにこの地図が科学的におかしいものだったかということが証明されてしまったわけです。

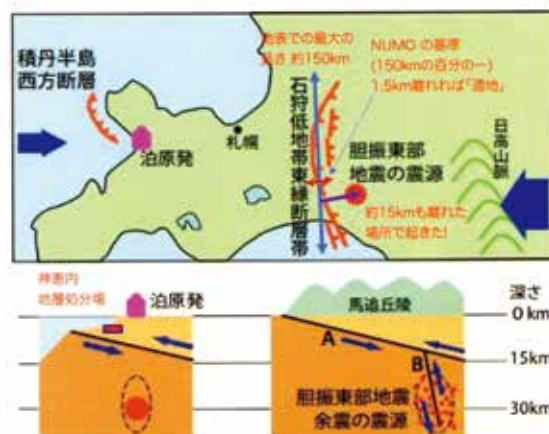
NUMO は、活断層については直上から左右に、「活断層の地上での長さの100分の1」だけ離せば大丈夫だと言ってるんですね。たとえば岩見沢から苫小牧のほうまで、長さが150キロ、延びている石狩低地帯東縁断層というのがあります。150キロの100分の1といったら1.5キロですから、ここでは、断層の両側、1.5キロを避ければ、あとはどこでも地層処分できますというのがNUMO の言い方です。

ところが胆振東部地震は、なんと、この断層より15キロも離れたところで起きちゃったわけです。だから100分の1 離せばいいなんていうのは、いかにいい加減なことかということが、証明されてしまったわけです。

胆振東部地震は、科学者にとっては想定外で、私たちはこの石狩低地帯東縁断層のことは前から研究していたので、それが地下ではこういうふうに傾いているということは分かってたわけです。ですから将来の地震は、ほぼこの上で起きるだろうと思っていたわけです。ところがなんと胆振東部地震は、地下30キロという、とんでもない深さで起きました。しかもそれがあれだけの被害を地上にもたらしたわけです。まだまだ私たちの科学はその程度だということなんですね。

泊原発でいいますと、海底に活断層があります。この活断層は、石狩低地帯東縁断層と同じに、東に向かって傾いています。ですから将来地震が起きると本当に原発の直下で起きてしまう可能性がある。そしてまた神恵内村で地層処分場をつくろうとすると、本当に活断層の直上でそれをやる可能性があるわけです。図には、それを拡大して示しました。

積丹沖の海底にずうっと活断層が並んでいます。そしてだいたい、陸上に向かって傾いているんですね。30度ぐらいで傾いていますので、神恵内村というのはご承知のよう

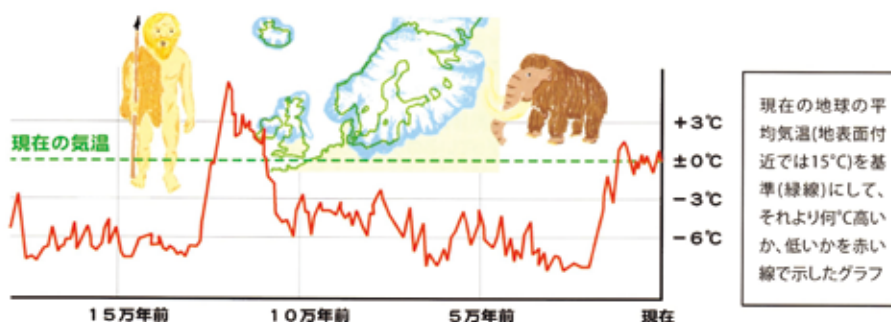


に村の中にはほとんど、NUMO の地図でさえ地層処分していい場所がないんです。ですからそこでやろうとするとどうしても海底につくらなきゃいけない。そうするとまさに活断層の直上ということになっちゃうんです。こういうことはちょっと世界では考えられないことです。

寿都町のほうは、黒松内低地帯断層帯の上にあります。活断層の見える崖の写真(略)を載せましたが、本当にナイフでスパッと切ったようになっていて、右のほうが左に向かって押しあがったようになっています。これが逆断層というものです。数万年前から何度も動いていて、政府の試算でもやはり今後30年間に動く可能性が非常にあるという断層なのです。そんなところに地層処分すること自体がおかしいわけです。

10万年ってどんな時間？

6番目の理由は、10万年という時間をちょっと考えてくださいということですね。みなさん日常的にはせいぜい数十年とか、100年ぐらいでしか物事を考えられないと思います。しかし地層処分は10万年間保管しなければいけないわけですね。じゃあ10万年前はどんな時代だったのかというと、まだネアンデルタール人がいた時代です。今の人類はいないですね。グラフの赤い線は地球上の気温です。現在の平均気温が緑の点線で書いてあります。今の地球の平均気温はだいたい15℃なんですね。それをゼロにして、それからプラスマイナスということで表現しています。ですからそれよりマイナスになれば氷河時代。いまは温暖化ですからむしろプラスのほう



に向いているわけです。要するに約10万年前から急に寒冷化して、氷河時代が始まったわけです。

そして今のフィンランドのあたりは巨大な氷河、氷床といいますけれども、それに覆われていたんですね。厚さが一番厚いところで4000メートルですね。富士山よりも高い。そしてドーム状ですから富士山と違って、末端くらいまでいって最後にストーンと落ちるという、そういう巨大な氷が載っていたわけです。こういう巨大な氷河ができると、世界中の海水が減っちゃうわけです。蒸発した分が全部氷河にいつちやいますので、海面が下がる。そうすると北海道はシベリアと陸続きになってマンモスが渡ってきたということですね。そういう全部の時間が10万年という時間なわけです。

ですからこれからまた10万年というのは本当に気の遠くなるような時間で、はたして人類が10万年後にいるかどうかさえ言えないわけですね。ですからそういう長い時間、そんな危険なものを人間が管理できるなんて言うこと自体、やっぱり人間の明らかなおごりでないかと思えますね。

そしてフィンランドがどうして地層処分に踏み切ったかという、小泉（純一郎）さんは総理大臣だったときは一所懸命原発を推進していたわけですが、3・11が起きて、彼は見に行ったわけですね。そしたらこれはフィンランドならできるかもしれないけれども日本では無理だということを初めて悟ったわけです。彼はそれから180度変わりまして、ずっと脱原発を言い続けています。

フィンランドはどんな国かという、これは今から20年ぐらい前に私が行ったときに撮った写真です（略）。首都のヘルシンキのその辺のスーパーマーケットの駐車場のそばですね。買い物した人が歩いて来るところを撮ったんですが、みんなが歩いているこの岩盤がさっきお話しした10億年間びくともしてないという岩盤なんです。つまりそういう固い岩盤の上で生活しているんですね。ですからそういう中では、地下にトンネルを掘ってそこに10万年間置いておくということも、考えられないことではない。

ただやっぱり反対している地質学者はたくさんいます。なぜかという、さっきお話ししたように、10万年前からあとに氷河時代が来たわけですね。今後また当然氷河時代が来ます。そうすると、今ゴミを埋めようとしている場所にまた4000メートルの氷が上にのっかっちゃうんですね。4000メートルの氷ののると、いくら硬い岩盤でもその重さで沈みます。それが水が解けるとまたもち上がる。だから地震はないんですけれども、氷ができたり解けたりすることで地盤が上がったり下がったりするんですね。それに伴って亀裂が入るんです。それからここはものすごく乾いているところですが、氷河が解けた時は大量の

水が出ますよね。そうすると水浸しになります。

そういう状況の変化を考えると、かえってフィンランドは危ないんじゃないかと心配する科学者は多いわけです。

7番目の理由です。NUMOは今、フィンランドやスウェーデンが先頭を走っています、フランスも3位につけていて後を追っかけています、日本はまだ最下位です、がんばりましょうみたいなことを言うわけですが、これもとんでもない話ですね。フランスが今3位とかいっても地元は大反対していて、ずっと止まっています。スイス、カナダも同じですね。ドイツはあるときは一番先を行っていたわけですね。アッセというところで、元は岩塩の鉱山だったんですね。日本人は塩というと海水からとると思ってますが、ヨーロッパではほとんど岩からとるんですね。岩の中に残っていた塩をとるわけです。それが残っているぐらいだから乾燥していて地下水もあまりない、そういう条件だからここに埋めちゃえということで、さっきお話しした低レベル放射性廃棄物をドラム缶に詰めてボンボン処分したのです。

ところが地下水が全くないはずの処分場に、処分してから10数年で地下水が入っちゃったんですね。そして最大で1日1万2000リットルの水が入って、全部汚染されました。そして周辺では白血病が出たり、甲状腺がんが出たりしています。で、ここは完全に中止になりましたけれども、いまだにまだこの処分ができてないわけですね。要するに汚染されちゃってるから、いじるわけにいかないの、まだこれをどうするのかさえ決まってないんです。処分場を別につくりましょうといったって、みんなアッセの例を知ってますから、今ゴアレーベンというところでやろうとしているけど、みんな大反対しているんですね。

「地球で最も安全な場所を探して」という映画が、実際にできたのは2013年ですけど、今年、日本で公開されました。これは非常に面白い映画で、チャールズ・マッコビーという、地層処分を推進している原子力学者が、世界で一番安全な場所を探して、世界中を旅するという映画なんですね。あちこち行くんだけど、結局はいい場所が見つかりませんということで、さあどうなるでしょうみたいな映画になっているんです。

たとえばアメリカでは、先住民が反対している。先住民が住んでいる元々の場所に埋めようとしたんですね。オーストラリアもそうです。すべて社会的に弱い立場の人たちがいるところにつけこんで、あとはお金で解決しようとする。すべて同じですね。

スウェーデンやフィンランドが違うのは、徹底的に住民に公開して議論しているという、そこが大きな違いです。

日本では

日本では、日本学術会議がまず2012年に3つの提言を出しました。第1に核のゴミを出し続けている原発をやめて、これ以上ゴミを出さないようにすることが大前提でしょう。いわゆるゴミの総量規制ということです。

2番目が、とにかく地層処分というのはまだ技術的に確立されていないんですから、安全な処理方法が見つかるまでは、人間の目の届くところでしっかり管理する。当たり前のことでしょう。地下に埋めたらもれるということが分かっているのに、やるほど馬鹿なことはないでしょうというわけです。

3番目が、まさに寿都や神恵内で起きちゃったことです。要するに現状では、一部の人だけで地層処分を決めてしまえるんです。寿都は町長ひとりの権限で決めちゃったわけですね。そして神恵内はわずか4人ぐらいの村議の人たちがNUMOとつるんで密かに会合していたわけです。村議会で多数派だということで、その4人が提案してすぐ決めちゃった。こういうやり方自体が間違ってるでしょう。

そして最後、8つ目の理由ですが、最大の問題は、核燃料サイクルというすでに破綻しているものに無駄な税金がこれだけ使われているということです。税金だけでなく、環境への汚染がひどい。今回の自民党総裁選ではじめて河野（太郎）さんが核燃料サイクルを俺はやめるぞということを言いましたが、結局つぶされています。つまり政府はどんなに破綻していても、核燃料サイクルをやろうとしているわけです。

ウランサイクルというのは、ウランを燃やして、燃やしたあとを青森へ持って行って、六ヶ所村で再処理をして、そしてプルトニウムだけを取り出す。取り出したプルトニウムとウランを混ぜたものにMOX燃料という名前を付けたんですね。プルトニウム入りの新しい燃料でまた燃やす。プルトニウムはそうやって有効活用するというわけです。そしてプルトニウムを取り出したあとのものを地層処分するんだというわけですね。

ただ、プルトニウムはこれだけでは消費しきれないので、プルトニウムをもっと活用しようというのがプルトニウムサイクルです。まず「もんじゅ」という高速増殖炉を福井県につくって、ここでプルトニウムの純度を高くしようと考えたわけですね。そしてこれを回していると、だんだん純度が高くなって、結局は原発ができますということです。

人類に初めて落とされたプルトニウム爆弾が長崎の原爆です。日本人は世界で唯一プルトニウム原爆の被害者なわけですね。それを自分で持とうとしているわけです。自民党の中曽根（康弘）さんが、日本は世界唯一の被爆国だから核兵器は持つことはできない、でも潜在的に核戦力を持つことはすべきで

あると言ったわけですね。プルトニウムさえ持っていれば、半年で原爆はできるでしょう。そういう潜在的核戦力というものを持ちたいというのが、自民党の一貫した政策なのです。

最後によく質問されるのは、小野先生の言うことはよくわかりましたが、とりあえず今まで溜まっちゃった核燃料をどうするんですかということです。これは乾式貯蔵でやっていけば十分だということです。今これで保管できてるわけですから、問題はありません。しかし問題なのは、乾式貯蔵するには、キャスクが要ります。つまりグラグラしないように支えておかなきゃいけないですよ。これは金属でつくるわけですが、強い放射能を浴びますから、20、30年経つとかなり痛んでくるわけです。50年経ったらたぶんボロボロになって支えられなくなっちゃうかもしれない。じゃあどうするかということです。

式年遷宮方式を提案

そこで提案しているのが、伊勢神宮の式年遷宮という考え方です。これは日本が世界に誇る文化だと思います。どういうことかということ、今年、新しい神社ができたとなると、古い神社から神様をそこに移すのですが、同時に、すぐそばに、もう1つ神社をつくり始めるのです。それが20年後に完成すると、今度は今の神社から、そちらへ神様を移すわけです。つまり、つねに神社をつくり続けて、20年ごとに神様に新しい神社に移ってもらうのです。新しい神社に神様が移ったとたん古い神社はすぐ壊すんですよ。壊してまたここに新しい神社を建てるんです。新しい神社を建てたたん20年後のことを考えてつくり始めるんですね。そして20年経ったら今度は今の神社が古くなるから、神様にまた移っていただく。これを20年ごとに繰り返すのが式年遷宮という考え方です。

最初はなんという資源の無駄遣いだと思ったんですよ。まだ十分に使えるのに20年で無駄にしちゃうのかと思ったら、いやそうじゃないんだ、20年じゃないと、神社をつくる宮大工の技術が伝わらないというんですね。棟梁が自分の弟子に実際に伝えていかないと、技術が伝えられないと。ですから1世代で考えると、20年の間にそれをやらないと、正確に手仕事のやり方が伝わらないということです。

核のゴミの場合は、20—30年でキャスクがかなり傷んできますので、要するに新しい乾式貯蔵の施設をつくったら、同時にもう1本新しいものをつくるということです。そしてこっちが痛んできたら次のものに移す。こっちに移ったとたんまた別のものをつくるということで、20年ごとに移動させていけばいいということです。200年間に10回移動すればそれで十分できてしまう。これを全部、今の原発の敷地の中でやらせる。ここが大事な点です。外

に持ち出すことを絶対に許してはいけない。外に持ち出したら地層処分と同じで、全部拡散してしまうことになりますから。

核のゴミというのは、ある意味、製造物責任だと思っただけですね。それを出したところにそこで管理すべきであるというふうに思います。ですから原発の敷地内ですべてこれをやらせる。そうしたら少なくとも200年間はそれで十分にいけるはずであるということですね。その間に一所懸命次のステップについてみんなで考えましょうということです。

そういうことで、いま地層処分することがいかに間違ってるかということが少しでもおわかりいただけたんではないかなと思います。

質疑応答

松崎(道幸=司会) 今日の話で良くわかったのは、今まで二次元で、地図で活断層が泊原発のそばを走ってるかどうかというのが問題だと思っていたのが、そのずっと下のほうに地層変化があるので、二次元ではなくて三次元で考えよう。そして時間軸のことも十分考えて、この問題を取り扱っていかなければいけないということです。

福原(正和) 福島に娘と孫がいるので時々行くんですが、中間貯蔵施設という形でフレコンバッグがたくさんあるという状況があって、それで中間とついたら最終処分場はどこになるんだろうか。最終処分場は福島県じゃないというふうな考えを持っている方も福島の中では結構いらっしゃるんです。

自分たちの原発がないところで最終なんて受け入れるところがあるんだろうかというふうに素朴に思ってたんですけど、まさに寿都町が最終処分場になるという認識が私はなかったというか、それがあまりつながってなかったような気がするので、やっぱりこれは全国の核のゴミがみんな寿都や神恵内に集まってくるんだという認識はするべきかなと。

それから福島原発のメルトダウンしたものを処置するのにロボットでやると。ロボットはやっぱり放射能に弱いんですね。それについてもうちょっと教えてください。

小野 私はロボットの専門家じゃないので詳しいことはわかりませんが、とにかく基本的にICというのは放射能に弱いんです。放射能によってICがおかしくなっちゃうわけですから、そう簡単にうまくいかないですね。

デブリの除去なんていうのも本当はありえない話だと思います。チェルノブイリと同じで、いわゆる石棺方式しかないと思うんですよ。結局それは福島の人たちへの、これだけ大きな犠牲を与えておいて、さらにここにずっと置いておくのかという政治的な判断があって、石棺方式を言い出せないでいるだけ

じゃないかなと思うんです。

小出(裕章)さんなんかは最初からそれをおっしゃってますよね。ほかはありえないでしょうと。デブリを取り出すなんていうことが、いかにもできるように言ってるけれども、それはほとんど無理じゃないでしょうか。だってそもそも、どこにどれだけ、どうなってるかさえわからないわけですからね。それを明らかにするだけでも、ロボットの限界があって、あるところまで行ったら放射能が高すぎてどうしようもないわけでしょう。

そして、いつの間にか、みんなメルトダウンという言葉でまとめられてしまってますけれど、実際にはもうメルトアウトといわなきゃいけないですよ。外にもれ出しているわけだから。本当は地下でもれている、メルト・スルーと言わなきゃいけないんです。

津田(孝、脱原発・自然エネルギーをすすめる苫小牧の会) 10月9日に、教育大学名誉教授の岡村聡先生に講演をしていただいたんですね。寿都や神恵内というのは、地層処分としては最悪のところだという結論でした。つまり、水冷破碎岩といって、地下のマグマが海水によって急激に冷却されて、非常に脆い岩質になっていると。

1996年に余市の近くの豊浜トンネルが崩落して20人の方が亡くなりましたね。それなんかと同じ地質といいましょうか。そこに300メートルもの穴を掘ったら、地下水が流入してどうしようもないと思うんです。10月13日に岡村先生たちが声明を発表されています。しかしNUMOも経産省もそれを聞き入れようとしません。

科学では反証可能性という言葉がありますが、そういうものを全く無視した非科学的な態度、それは小野先生が科学的特性マップが全然科学的じゃないということをおっしゃったのと同じなんですね。そういう意味では国策が非科学的な態度ですすめられていることに対して私たちはもっと重大な危機感を持って、これに反対していくべきじゃないかと思いました。

松崎 小野先生、今の地層のことで、コメントをいただけますか。

小野 岡村さんたちと一緒に声明を出しましたが、とにかく寿都や神恵内もそうですし、幌延も一番条件の悪いところですね。泥岩といって、きわめて柔らかい岩のところ。そういう地層処分できないようなところで一所懸命、研究と称してやってるわけ。それはまあ研究なんだからいいだろうという考え方もあるかもしれないけれど、研究というのはあくまで見通しがあるからやるわけで、もう箸にも棒にもかからないようなところでいくらやっても、それはお金の無駄遣いだと思うんですね。

結局、国やNUMOとしては、そういうのをやっていますよということを示したいわけですね。だから

実際の地層がとうてい地層処分には適してなくても、関係ないですよ。言ってみればもうどんなところでもいいんだと。それは無責任以外の何物でもないわけですが、本当にそういうふうにしかならない。

科学的な議論というのを全く最初からしようとしません。フィンランドみたいな地球上で一番安定している場所と、日本みたいな一番不安定な場所で同じことができるはずがないわけです。そもそも全く土俵が違うでしょうと言っても、全く議論しようとしません。そういうことは無視したうえで、あくまで日本の中で物事を考えましようとか、日本ではここがいいですよと、さっきの科学的特性マップみたいなことをいきなり言いだしてくるわけです。全然話にならないですね、科学者からすると。でも結局それを最後まで彼らは押し通そうとする。非常に困った状況だなと思います。これはやっぱり市民がとにかくそういうことは許さないということをみんなで言うしかないんじゃないかなと思います。

岩波の「科学」という雑誌の(2021年)1月号にきょうお話ししたことを詳しく書きましたので読んでいただければと思います。

間間(元、反核医師の会・静岡) 金属製のキャスクと乾式貯蔵の安全性というのは、もうすでに確立された技術ということではないでしょうか。

小野 僕自身は技術屋ではないですが、少なくとも今までの実績的にいって、もうそれがつくられてからその時間の中では十分に、何も事故も起きていませんし、原理的にもこういうふうに大きな問題があるとは思われませんか。専門家からもここがどうしてもおかしいと聞いたことはないです。ただキャスク自体はあくまで金属ですから、これが強い放射能によって劣化することは当たり前です。おそらく50年はもたないだろうというふうに多くの人が言っていると思います。ですから、私は20年ぐらいで、まだそれがしっかりした状態のときに新しいところに移すべきだというふうに提案しているわけです。この辺はもちろん金属の専門家を入れたうえでさらに細かく検討していく必要があるだろうと思いますが、基本的な考え方は間違っていないんじゃないかなと思います。

間間 六ヶ所の廃棄物もその方法でOKであるというのが、専門家のご意見でしょうか。

小野 はい、六ヶ所では、現在すでにそうやって保管しているわけですね。とくにガラス固化体を乾式貯蔵で保管していて、すぐその上に、厚さ2メートルぐらいのコンクリートの壁(天井)があるわけですね。その上に人間が乗かって、全然大丈夫ですよ、全部遮蔽されていますよと、NUMO自身が宣伝しているぐらいですから、まあ大丈夫なんですよ。これは世界的にもすべていま乾式貯蔵でやって

るわけです。

日本が間違っているのは、なにしろ安くやろうという経済性が先にあるわけですね。ですから本来な部乾式貯蔵に持っていかばいいのに、できるだけ長くプールに突っ込んでおいて、そこからいきなり地層処分をやっちゃおうというんですね。そういう魂胆なわけですが、海外は、全部いま乾式貯蔵でやっているわけです。もちろん海外も、乾式貯蔵で終わるんじゃないで、いずれはそれを地層処分しようとはしていますが。ただ日本と違うのは、海外は再処理をやろうとしない。プルトニウムを取り出すと、核兵器の原料になりますから、厄介なことになりますし、再処理そのものがとても恐ろしい。だって使用済み核燃料をドロドロに溶かすんですよ。そこでいかにひどい汚染が出るか、わかっているのです。だから海外はすべて燃料棒のまま埋める。これを直接処分といっていますね。ですから乾式貯蔵でできるだけやったうえで、最後は直接処分しようと海外は考えているわけです。日本だけがプルトニウム(爆弾)に固執しているわけで、これもまたおかしいことだと思います。

嶋本(義雄) 汚染水の処理の問題で、海洋放出がいわれてますけれども、どう考えたらいいのでしょうか。

小野 全く同じことです。汚染水はやっぱりトリチウムが一番問題なわけですが、トリチウム以外のものも入っていると思います。これも電力会社は同じことを言っているわけです。もう置いとく場所がないから、それで放出するんだと。それはウソでしょうと。置いとく場所はいっぱいあるじゃないですか。あの敷地のところにね。タンクを増やしていくだけでいいわけです。もちろん場所が足りなければ地元の人から借り上げればいい。足りない足りないなんていうのはウソです。それと同じことで、今お話ししているように乾式貯蔵でやるスペースは十分にあるわけですから、そこにお金さえ使えば、それでできてしまう。

そしてトリチウムは、地層処分する核廃棄物とは違って、半減期がもっと短いですから(12.3年)、あそこに置いとくだけでかなり減ります。地上でただタンクに入れて溜めておくだけで放射能が減るわけです。減ったうえでも海上に出すのは反対だけれども、そこで考えればいいでしょう。少なくとも今は溜めとけばいいだけの話なんですから、なぜそれができないのってね。それはやっぱり電力会社の本当に勝手な都合だけで動いているということですね。**松崎** 本当に科学的根拠もあって解決方法もあるということが分かったということで、これを実現するための総選挙も近いので、そういう力をわれわれの側がつかむかどうかで決まると思います。小野先生、本日はどうもありがとうございました。(拍手)

本会事務局には、全国各地からニュース・会報等が届きます。コロナ禍でも全国で奮闘されている仲間の活動の一端をご紹介します（発行日順）。

和歌山（ニュース第94号＝2021年9月5日、B5版縦組4頁）

核戦争防止と和歌山県医師の会ニュース第94号は、4ページながら中味の濃いものになっています。I C A N（核兵器廃絶国際キャンペーン）は、2020年の核保有9ヶ国の核兵器関連支出額を調べた報告書をまとめています。それによるとコロナ禍のなかでも7兆9000億円が支出され（表）、前年より1500億円増加しています。11の企業が総額で3兆円の利益を上げ、127億円かけてロビイストを雇って核兵器により多くのお金を費やすよう政策決定者に迫っていたのです。

〈核保有9カ国の推定支出額〉

米国	約374億ドル（約4兆1000億円）
中国	約101億ドル（約1兆1000億円）
ロシア	約80億ドル（約8800億円）
英国	約62億ドル（約6800億円）
フランス	約57億ドル（約6200億円）
インド	約25億ドル（約2700億円）
イスラエル	約11億ドル（約1200億円）
パキスタン	約10億ドル（約1100億円）
北朝鮮	約7億ドル（約730億円）

埼玉（ニュース第23号＝2021年10月、24号＝2022年2月、A4版横組8頁）

核戦争を防止する埼玉県医師・歯科医師の会のニュース第23号では昨年5月22日に第16回定期総会を開催し、日本被団協の代表委員である田中熙巳氏が講演、核兵器禁止条約の実現に被爆者の証言活動が大きな役割を果たしたこと、締約国ではないので違反しても良いとは道義上ならないことを強調しました。

また同会が後援している「沖縄の闘いに連帯する関東の会」の活動を23、24号で詳しく紹介、遺骨の入った土砂で軍事基地は作らせないために奮闘する具志堅隆松氏（沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表）のハンガーストライキの様子や第7回「連帯するつどい」が昨年11月に120人の参加で開かれたことを掲載しています。

福岡（ニュースレター第111号＝2021年10月18日、第112号＝2022年1月31日、A4版横組8頁）

核戦争防止・核兵器廃絶を求める福岡県医師・歯科

医師の会では精力的にニュースレターを発行していて、世話人や事務局の奮闘に敬意を表します。内容も、巻頭言、核をめぐる情勢、総会や平和のための戦争展 in 北九州の報告、本の紹介など盛りだくさんです。事務局の森永氏による編集後記も味があります（112号では斎藤幸平著「人新世の『資本論』」が取り上げられていました）。

東京（ニュース第118号＝2021年10月21日、119号＝2021年12月28日、B5版横組8-20頁）

核兵器廃絶・核戦争防止東京医師・歯科医師・医学者の会のニュース118号では、ピース・ドクターのコーナーに橋本健一先生（はしもと歯科クリニック＝東村山市）が登場、小学生のときに見た原爆被害の写真に衝撃を受け、高校の修学旅行では広島平和記念資料館を訪れてやはり大きな衝撃を受けた由。核兵器と戦争をなくすことに貢献したいとの思いで反核医師の会に参加しています。

119号には新入会された安田綾先生（東葛病院＝千葉県流山市）の歌にこめられた思いが語られ、感動を呼びます。2021年の活動報告と2022年の活動方針（案）が掲載され、2月の総会・記念講演会（本田孝也長崎県保険医協会会長）への参加が呼びかけられています。

富山（会報第56号＝2021年11月25日、A4版横組8頁）

核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会では昨年8月6日、富山県被爆者協議会など県内の非核3団体とともに富山県庁を訪問し、新田八朗県知事と懇談しました。核兵器禁止条約の署名・批准を日本政府に働きかけることや、県平和行政の発展を図ることなどを要望し、新田知事は「核廃絶については政府の立場は理解できる。（中略）これからも意見交換をさせて頂きたい」と述べました。

国連核兵器廃絶デーの9月26日、核戦争を防止する石川医師の会主催で田上富久長崎市長のオンライン講演会「核兵器のない世界へ 長崎に学ぼう 平和を築く自治体と市民の力」が開かれましたが、富山の会では富山市内にパブリックビューイング会場を設けて視聴と参加を呼びかけました。講演（120分）は同会のホームページから視聴することができます。講演資料のダウンロードも可能です。

愛知（反核医師ジャーナル第85号＝2021年12月25日、A4版縦組8頁）

核戦争に反対する医師の会・愛知の「反核医師ジャーナル」第85号は、反核医師のつどい in 千葉の報告、7月に行われた39周年記念講演会（「そこが聞きたい核兵器禁止条約の効力」、川崎哲 ICAN 国際運営委員）の要旨、さらに核兵器禁止条約の現状や国内の議員や自治体の賛同状況についても「議員ウォッチ」の調査を紹介しています（下表）。

核兵器禁止条約に対する衆院議員の立場

政党名(議員数)	賛同	オブザーバー参加	不参加	未回答・賛否不明
自民 (262)	29	56	49	128
公明 (32)	10	6	0	16
立憲民主 (96)	83	12	0	1
日本維新の会 (41)	5	31	1	4
国民民主 (11)	7	3	0	1
共産 (10)	10	0	0	0
れいわ (3)	3	0	0	0
社民 (1)	1	0	0	0
無所属 (9)	5	2	1	1
合 計 (465)	153	110	51	151

※議員ウォッチの調査結果を基に作成
西日本新聞(2021年11月10日付)より

新潟（ニュース第79号＝2022年1月、A4版横組10頁）

核戦争に反対する新潟県医師・歯科医師の会ニュースはオールカラーで写真も鮮明でインパクトがあります。79号の冒頭には谷田部雄二代表世話人の恒例の巻頭挨拶があり、「核兵器禁止条約の締約国会議に期待する」と題して、「世界の多くの国が核なき世界への賛同を示している」なか、核保有5ヶ国の共同声明が出され、「核戦争に勝者はおらず、決して戦ってはならないことを確認する」と述べられているが、これは核禁条約の倫理性を核保有国も認めざるを得なくなったものだ指摘しています。

原発関連のニュースもていねいにフォローされているのと、毎回「各地の便り」と題して北海道の会も含めて読みどころが紹介されており、編集者の労を多とします。

（文責 塩川哲男＝事務局長）



正面上から時計回りに、和歌山、埼玉、福岡、東京、富山、愛知、新潟

作陶展“広島 vol.2、

福山 桂子

2021年に反核医師の会に再入会しました。数年前から陶芸作品により、家族の被爆体験を語り、表現しています。

“広島vol.1、は、Web上で2020年8月に公開(www.keikofukuyama.com)。2021年11月に“広島 vol.2、を、埼玉県の「原爆の図丸木美術館」で展示しました。そこは原爆の図で知られています。丸木夫妻が発表を開始したのは1950年で、米軍占領下であり、原爆被害の実相について知らせ、写真を公開することは認められませんでした。夫妻はその状況下で原爆に苦しむ人々の姿を描き出しました。夫妻はそれから1982年までに15枚の絵により、原爆被害を訴え、平和を祈る人々を描き発表します。それらは全国を巡回し、さらに国外展示も行われました。絵は和紙に墨で描かれ、屏風仕立てになっています。1枚が180×90cmのパネルを4枚一組として二組で構成された180×720cmの巨大な作品群です。第1作は“幽霊、と題され、被爆直後の焼けただれ、生死をさまよう人々が、焼け崩れ斃れた死者の間を茫然と歩く様子が描かれています。

丸木夫妻の絵の隣室で、私の“広島1945/8/6、と名付けた陶器作品を陳列しました。広島では、叔父が14歳時に、建物疎開作業從事中に被爆死しました。作品“敬文と淑子(叔父と叔母の名前)、は原爆炸裂直後の惨状を、叔父を探して歩く祖父の視点を想像して作りました(写真)。さらに70年近く経ってから叔母が発症した後遺症に対する怒りの表現として“(赤核)²=0、を作りました。叔母は17歳の時に、



敬文と淑子—8月6日、そしてその後—2014年 W90×D50×H60cm
第43回北海道陶芸展 会員優秀賞受賞作品

爆心から2.2kmで被爆し、68年後に骨髄異形成症候群(MDS)と診断されました。MDSは爆心地に近いほど発症頻度が高く、また若年被爆者の高齢になってからのガンの発症は、被爆経験の無い人に比べ高いのです。原爆の怖さは持続する放射能の影響と感じています。作品には、炎、青い平和、かつて人間たりし土、歹(残骨の意味)、鴉、黒い雨、水をください、折り鶴、祈りなどがあります。

直接の体験者が亡くなり、戦争体験者を親世代とする私世代も消滅する今後、私に見えている被爆像(燃える人々や、積み重なって煙となる様、川に残された骨やご遺体など)を、陶芸によって他者にも見える形に表現し、原爆の非人間性を若い世代にも伝えたいと思います。[2021年12月記]

(勤医協札幌病院小児科)

福島第一原発事故から11年、甲状腺検査の現状報告について思うこと

井上 篤

Web上で閲覧できる福島県民健康調査「甲状腺検査」の報告を一部紹介しつつ、かつての上級医に喝を入れられそうな拙い文章ですが、寄稿させていただきます。

2011年3月11日、東京電力の福島第一原子力発電所で発生した原子力事故。福島県内に放出された放射性物質は、ウランの核分裂によって生成されたヨウ素131、セシウム137、ストロンチウム90、副次的に生成されたセシウム134などがあります。甲状腺検査と関連するのはこのうちヨウ素131とセシウム137となります。

福島県民の被ばく線量調査

健康調査の基本調査から、放射線の最大被ばく例でも25mSvに留まると報告されています(Ishikawa et al. Sci Rep 2015;5:12712)。また、最近では福島県1歳児の甲状腺等価線量は1.2-2.5mSvとの報告もあります(Ohba T et al. Sci Rep 2020)。「人への健康被害が確認されている被ばく線量の閾値は100mSv」と政府をはじめ、多くのwebではこの文言が目立ちます。結論として、被ばく線量を考えれば、健康被害は少ないとするものであります。ところが、先日、北海道がんセンター名誉院長の西尾正道先生を講師とした勉強会にzoomで参加し、衝撃を受けました。まず、福島県内の放射線量を測定するモニタリングポストで4割減の数字が作為的に提示されて

いる。これは、県民の生活の場が24時間屋外にいる訳ではないため、その分を差し引かれているという理屈だそうです。そして、外部被ばくもさる事がなら内部被ばくの線量は十分な測定すらされておらず、そもそも人体に及ぼす影響を客観的に示すSv（シーベルト）の単位は意味があるものなのか、結論として無意味。例えばヨウ素131を内部被ばくした時、放出される90%のβ線で2mmの飛程、近傍の細胞には多大な影響を受けるが、それ以外の細胞への影響はほぼなし。これを核種毎にBq(ベクレル)からSvに換算する預託実効線量係数で内部被ばく線量を論じて放射線による健康被害は見えてこない。更に、放射線による健康被害は、被ばくした閾値100mSvではなく、総線量依存性にがんリスクが増すとのことでした。そして最も強いメッセージは、この問題に対して医師として傍観者になってはいけいと受け止めました。

福島県民健康調査「甲状腺検査」の目的と方法 および結果

目的は福島県の子供たちの健康を長期に見守ることであって、注目されがちな放射線被ばくによって甲状腺癌の発生が増加するか否かを調査することではないとしています。調査開始時に被ばく線量を正確に測定していなければ、これも妥当な目的なのかもしれません。対象は原発事故当時、福島県内に在住していた18歳以下の県民、方法は超音波検査による一次検査、20歳までは2年毎、20歳を超えてから

は5年毎。二次検査は診察と詳細な超音波検査、血液検査、尿中ヨウ素、穿刺吸引細胞診です。結果は以下の表です（日本甲状腺学会誌 October 2021 Vol 12 No2 pp. 135）。

この数字をどう見るか？40万人弱にエコーをあてて検査をすると、260人が悪性ないし、悪性の疑いと診断され、219人が手術を受けている。この規模の調査と比較する国内のstudyは存在しないため比較することは難しいですが、甲状腺癌発見率からするとそれほど多くはないとするのが、公式な見解です。調査を重ねる毎に癌診断率が低下していることはいわゆる過剰診断ではなくスクリーニング効果であると先日ご教示頂きましたが、日々、超音波と穿刺吸引細胞診に向き合っている開業医にすると「かなり無理のある超早期発見甲状腺癌」とも言えます。健康調査を受けずに今後10-20年経過してから発見される、つまり通常の保険診療も含めて診断される福島県住民あるいは元住民の甲状腺癌と生命予後に違いがあるかは課題として注目してゆきます。一方、患者目線ではどうでしょうか。放射線被ばくの被害を受けた住民にとって健康調査を実施することは、頼れる、安心できる制度に違いはありません。今後、放射線被ばくを受けた多くの人の移動もあるはず。私も専門医の端くれとして、患者さんに安心を提供することを第一に考えた診療に心掛けることとします。

（甲状腺・糖尿病クリニック 中の島）

表 福島県県民健康調査「甲状腺検査」の結果

		先行検査 (検査1回目)*	本格検査1回目 (検査2回目)**	本格検査2回目 (検査3回目)**	本格検査3回目 (検査4回目)***	25歳の節目の 検査****
実施年度		2011～2013	2014～2015	2016～2017	2018～2019	2017～
対象者		367,637	318,237	336,667	294,239	87,684
受診率		81.7%	71.0%	64.7%	62.3%	8.7%
判定結果	A 1	51.5%	40.2%	35.1%	33.6%	42.7%
	A 2	47.8%	59.0%	64.2%	65.6%	52.3%
	B	0.8%	0.8%	0.7%	0.8%	4.9%
	C	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
二次検査対象者		2,293	2,230	1,502	1,383	359
二次検査受診率		92.9%	84.2%	73.4%	70.3%	66.6%
悪性ないし悪性疑い (細胞診断)		116	71	31	33	9
治療(手術など)		102	55	29	27	6
病理診断	乳頭癌	100	54	29	27	5
	濾胞癌					1
	低分化癌	1				
その他		1(良性)	1(その他の甲状腺癌)			

*:2018年3月31日現在、**:2021年3月31日現在、***:2021年3月31日現在(二次検査進行中)、****:2021年3月31日現在(一次・二次検査進行中)

2022年4月以降の主なイベント

- ◆6月12日 核戦争に反対する医師の会(PANW)第18回全国大会(東京)
- ◆6月-7月 本会第34回総会
- ◆8月 NPT再検討会議(ニューヨーク)
- ◆8月2-9日 原水爆禁止2022年世界大会(広島,長崎)
- ◆8月6日(土) 北海道原爆死没者追悼会(札幌)
- ◆9月頃 第32回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい(神戸)

会員の動き (2021年9月～2022年2月)

【入会】

鳥井 沙南 北大医学部6年生
福山 桂子 小児科 勤医協札幌病院

【退会】

多田 崇子 死亡退会 (2021年11月27日)
(敬称略)

会員数は2月末現在で**132名** (うち準会員=学生1名) となっています。また、正会員131名のうち、医科は127名、歯科は4名となっています。

活動日誌 (2021年9月～2022年2月)

【9月】

18日 第64回運営委員会 (道民医連)
20日 会報第65号発行

【10月】

16日 第33回総会 (道民医連、Zoom 併用)
24日 第24回泊原発を再稼働させない・核ゴミを持ち込ませない北海道連絡会全体会議 (塩川事務局長、札幌エルプラザ)
30-31日 第31回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい in 千葉 (オンライン) に塩川事務局長、福原事務局次長、水尾仁志先生、峯廻攻守先生、伊古田明美先生、西尾正道先生、細川誉至雄先生、大倉秀顕先生、鳥井沙南さんが参加

【11月】

13日 核ゴミ問題を考える北海道会議 in 札幌 (塩川事務局長)

【12月】

4日 第25回泊原発を再稼働させない・核ゴミを持ち込ませない北海道連絡会全体会議 (塩川事務局長、ネット参加)

2022年

【1月】

16日 全国反核医師の会常任世話人会 (塩川事務

局長、ネット参加)

【2月】

5日 第26回泊原発を再稼働させない・核ゴミを持ち込ませない北海道連絡会全体会議 (塩川事務局長、ネット参加)
19日・26日 西尾正道先生オンライン学習会 (医療九条の会・北海道と共催)

事務局から

▼まもなく新年度になりますので、年会費の納入をお願いいたします (同封の振込用紙をご利用ください)。カンパも歓迎します。

▼住所や勤務先、メール・アドレスが変わった場合はぜひ本会にもご連絡ください (Eメールは本会ホームページからどうぞ)。なお、経費節約のため、民医連勤務の先生方には原則として勤務先に印刷物を送付しておりますが、自宅への配送を希望の先生はその旨ご指示ください。

編集後記

▼会報第66号をお届けします。

▼ロシアのウクライナ侵攻は決して許されるべきものではないが、この事態を利用して安倍元首相は非核三原則を無視、「日本国内に米国核の配備も」と、被爆者の「再び核兵器の被害者を出さない」気持ちを踏みにじる発言。安倍氏の顔色を伺う岸田首相は「敵基地攻撃能力」にも前向き発言。今、日本国民が歴史に問われている事態に。(F)

▼ウクライナの原因にロシアが攻撃をしかけたと聞いて愕然としました。大事故を起こしたチェルノブイリ原発もウクライナ (当時はソ連邦) にあったのです。国が異なれば、攻撃の対象となるとはどうか被ばくによる新たな犠牲者が出ないことを祈り、できるところから行動したいと思います。

No More Hibakushas! No More Wars! (S)

規 約

1989年6月4日制定
1990年6月10日一部改正
1994年7月10日一部改正
1995年6月11日一部改正
2001年6月24日一部改正
2015年7月4日一部改正
2020年11月1日一部改正

1. 本会は、「核戦争に反対する北海道医師・歯科医師の会」(略称「北海道反核医師・歯科医師の会」、英名 Hokkaido Physicians and Dentists Against Nuclear War) と称し、事務所を札幌市内におく。
2. 本会の目的は、核戦争に反対し、核兵器廃絶のために、ヒューマンイズムにもとづき、医師として可能な限り努力を払うことにある。
3. 本会は、会の目的に賛同する全道の医師・歯科医師によって構成する。医学生および歯学生は準会員とする。
4. 本会は、次の事業を行なう。
(イ) 他都府県の同趣旨の医師の会と連携を保ちつつ、「核戦争防止国際医師会議(IPPNW)」の活動に協力する。
(ロ) 核兵器完全禁止署名への協力。

- (ハ) 原子力発電に反対し、原発のない社会をめざす活動に協力する。
- (ニ) そのほか、核戦争の悲惨さを訴え、核兵器完全禁止をめざすために研究会、講演会、出版などの活動を行なう。
5. 本会は、特定の政党または宗派のための活動は一切行わない。
6. 本会に、会長と若干名の代表委員と監事および事務局長、事務局次長をおく。会長、代表委員と事務局で運営委員会をつくり、規約に従って活動を行なう。
7. 本会に功績のあった会員は名誉会員となることができる。名誉会員は運営委員会で推薦し、総会の承認を受けるものとする。名誉会員の会費は免除する。
8. 本会の会費は、会費および寄付金をもって充てる。会費は年額5,000円、準会員は1,000円とする。ただし、年度後半の入会の初年度会費は半額とする。会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。
9. 本会は、年1回以上、総会を行なう。総会の議決は出席者の過半数をもって行なう。
10. 本規約の変更は総会で行なう。